

(別紙) 被表彰団体の概要

- 1 団体名・代表者 逢東踊り保存会 (会長 黒田 昭夫)
- 2 指定等 平成6年赤碓町無形民俗文化財に指定 (現・琴浦町指定無形民俗文化財)
- 3 伝統文化の概要

江戸時代、逢東は由良・赤碓間の宿場町であり、藩倉も存在した港町として栄えた。人の出入りから、様々な地方の踊りが混入してできあがったのが、現在の逢東盆踊りであるといわれている。現在、8月14日に行われる集落の盆踊り大会に海に面したあじさい公園、8月23日に行われる林泉寺観音祭に同寺境内で踊られる。

檜はなく、中央に竹や木で組んだ台の上に太鼓を置き、その周りを踊り手が踊る。太鼓叩きは男性が務めるが、服装に決まりがなく、仮装でもよいとされている。現在は浴衣・赤いたすき・ハチマキ・草履が多い。歌い手は男女とも、浴衣に編み笠を被る。踊り手の女性は赤い帯を締め、赤いお腰をすそからのぞかせる。

踊りの種類は「ぼたもち踊り」「ふりだし踊り」「西郷音頭」「伊勢音頭」「志賀団七」「大文字茶屋」「丁半踊り」の7種類あり、その踊る順序も決まっていた。男子が「ぼたもち踊り」で始めると、次に女子が「ふりだし踊り」を踊り、その後一緒に「西郷音頭」「伊勢音頭」「志賀団七」「大文字茶屋」「丁半踊り」を踊った (現在は「ぼたもち踊り」「ふりだし踊り」の2種類は踊られなくなっている)。

それぞれの踊りの詳細は、①大文字茶屋・・・京都伏見踊りを習って持ち帰ったもの。太鼓を鳴らし、念仏を唱えながら踊る。②丁半踊り・・・江戸時代に年貢米を運搬していた水夫がばくちをしていて、手踊りが始まりとされている。サイコロでの勝負の様子を踊っている。③志賀団七・・・浄瑠璃からきている踊り。男女一組になって踊り、男役は刀、女役はなぎなたを持ち仇討の場面を再現する。④伊勢音頭・・・伊勢参りをした人々が習って帰ってきたのがはじまりと言われている。賑やかな踊りで全体の主流になっている。⑤西郷踊り・・・隠岐の島から漁師が持ちかえった唄が始まりと言われている。踊りの振りは伊勢音頭と同じだがテンポが違うため印象は違って見える。



4 保存会の活動

昭和初期、都会に出ていくものが多くなり盆踊りの活気が衰えはじめたとき、運悪く戦争に突入、戦後しばらくは逢東盆踊りも衰退していた。昭和28年に現会長の祖父に当たる黒田義一氏ら有志

数名が復活させた。昭和35年に保存会が結成され、組織として地域の盆踊りを残していこうという動きになった。こうした活動が実を結び、平成6年には赤碕町の無形民俗文化財に指定された。

また、後継者育成にも力を入れており、会員外にも小・中学生や保育園児の母親等15名ほどが毎週土曜日に、太鼓・唄踊りの練習をしているので、その指導に当たっている。平成18年には鳥取県青少年郷土芸能の祭典2006にも出演し、踊り手だけでなく歌い手や太鼓までも子どもが務めるという、ほかにない後継者育成の充実をみせることができた。このほか逢東盆踊大会をはじめ町内のイベントや要請があればその他のイベントにも参加している。平成24年にはTSK助成事業を受け、用具の整備も行っている。

以上、保存会の熱心な活動により、地区に伝わる伝統文化の確実な保存・伝承がなされており、地域に伝わる貴重な伝統文化の振興に多大な貢献を果たしているといえる。